

日本におけるヘッセ受容 — 1940年代から50年代まで —

田 中 洋

アブストラクト

本稿では、近現代ドイツ・スイスの詩人そして作家であるヘルマン・ヘッセ（1877-1962）の日本における受容について、1940年代から50年代を射程として論じる。第二次大戦前後にヘッセ及びその作品についてなされた様々な言説の根底には、30年代までの最初期の受容におけるヘッセ像、すなわち「東洋」や「青春」といった鍵語から生成されたイメージが色濃く影を落としていた。しかし、同時期のゲルマニストたちによるヘッセ解釈の足跡からは、こうした伝統的な解釈を打開せんとする働きかけが徐々に現れてくる。そして、国語教育への浸透、新聞や雑誌といったメディア、一般読者の読書サークルを通じて、この時代にヘッセ受容は新たな広がりを見せ、ゲルマニストからより広範囲の読者の手へと渡っていったのである。

キーワード ヘルマン・ヘッセ 日本 受容 1940年代 1950年代

はじめに

本稿では1940年代から50年代までを考察範囲とし、ヘッセの日本における受容について論述する¹。大戦を挟み日本は激動の時代をくぐり抜けていったが、こうした情勢はヘッセならびにヘッセ作品受容にも少なからず影響を及ぼした。また読者層が広がりを見せる中、作家ならびに作品への解釈は多様性を増していく。その諸相を手がかりに、わが国におけるヘッセ受容においてこの20年間で担う意義を考察していきたい。

1. 第二次大戦周辺のヘッセ評価

Beckermannらによれば、読者のヘッセ受容が最盛期を迎えたのは1941年、日本が第二次大戦に参戦した時期であり、その一端を担ったのは文庫本を背囊に忍ばせて戦地へと赴いた若者たちであったともしている²。ドイツ文学者・高本研一は当時の情勢を踏まえつつ、ヘッセ受容の興盛について次のように述べている。

[...] 泥沼にはまった大陸での戦乱、不可解なヨーロッパ情勢によって、はっきりと形はとらないにしても、国民の間に滲透し

1 わが国におけるヘッセ以前のドイツ文化・文学受容の様相ならびに1900年代から30年代までのヘッセの最初期の受容については、拙論「日本におけるヘッセ受容——1930年代まで——」（『国際経営論集』神奈川大学経営学部、第52号、2016年、81-89頁所収）を参照。

2 Vgl. Beckermann, Thomas u. Miyashita, Keizo: Irgendetwas Unnennbares, wahrscheinlich Morgenländisches. Anmerkungen zur Hermann-Hesse-Rezeption in Japan. In: *Text+Kritik*. Heinz Ludwig Arnold(Hrsg.), München (edition text + kritik GmbH) 1977, Heft 10/11, S. 101-109, hier S. 101.

ていた危機意識に、ヘッセの文学が訴えるものを持っていた、というのが第一に挙げられるべき理由だったかもしれない³。

高本は、戦前に刊行開始された三笠書房版の翻訳全集が大戦突入後もなお刊行され続けたことに触れ、作品の邦題が果たした役割の大きさにも言及している⁴。同稿にはもう一点、示唆深い箇所がある。

ノートを取りながらヘッセを読み出したのは、昭和二十二年大学に入ってからだったと思う。そうなると、あの戦争中、わが国でもはやされたヘッセは虚像ではないのか、つまり毒を抜かれたヘッセではないのかという思いが、段々強くなってきた。戦前は、今では考えられないほどの厳しい検閲制度が布かれていたのだから、『省察』の中の反戦的論文が全部省かれていたのは当然だが、そのほか、『荒野の狼』や『ナルチスとゴルトムント』のエロチックな場面もことごとくカットされていた⁵。

作品に独自の邦題を付すという、出版社が全集を売り込む上でとった戦略と当時の日本の情勢が呼応し、「青春作家」という30年代から継承されるヘッセ像は、政治や愛欲とは無縁の「毒

を抜かれた」作家として固定されていった。

また、当時旧制高校のエリートたちによってドイツ語が持て囃されたことについて、森毅は「ギリシャ語やラテン語には手が届かぬので、身近なドイツで間に合わせたようなところもある」⁶とし、そして次のようにも述べている。

たしかに、戦前はドイツ文化が光彩を放っていた。戦争でドイツが友好国だったことは出版事情に影響があったかもしれぬが、時局を離れて文化を眺めたいと言うのも、エリート主義の一部であったから、直接には関係あるまい。その背景には、青春期の人間形成の延長上に人生があるという、明治以来の考えがあったような気がする⁷。

当時、ヘッセの平和主義者としての姿勢が知られていなかったことは、先の高本の二つ目の引用からも明らかである。そして、作品解釈が様々な形でイデオロギーに利用されたこともあった。例えば『シッダールタ』は日本の領土拡大政策を肯定する世界観のための文学的規範として利用された。すなわち「光は東方より来たり」というモットーをもって、アジアの植民地化を進めることを正当化する手段としてである⁸。一方で、日本学生協会⁹による1940年発行の『精神科学の根本問題』においては、最近流

3 高本研一「ヘッセへの感謝」（『ユリイカ 詩と批評』青土社、1982年4月号、98-102頁所収）100頁。同稿は「特集 ヘッセ 自己発見の文学」の記事の一つとして掲載された。

4 先の引用箇所に先立ち、次のようにある。「読者の気持をくすぐるように、『夢魂さまよふ』、『孤独な魂』、『湖畔の家』、『母に帰る』、『暁の巡礼』、『愛と反省』といった題名に飾られて、『デーミアン』、『ゲルトルート』、『ロスハルデ』、『童話』、『東方への旅』、『省察』が次々と巷に溢れ出たわけである。」

5 同書、101頁。

6 森毅「マンやヘッセを読んだ時代」（『週刊朝日百科 世界の文学62』朝日新聞社、1291号、2000年、46-47頁所収）46頁。

7 同上。

8 Vgl. Beckermann u. Miyashita, S. 102.

9 日本学生協会については、井上義和『日本主義と東京大学 昭和期学生思想運動の系譜』（柏書房、2008年）に詳しい。6-7頁に次のようにある。「この学生思想運動は、欧米思想追従の高等教育や学術研究の実態を憂える東京帝国大学の学生たちが、昭和十三年（一九三八）六月に東大精神科学研究会を結成するところから始まる。彼らは『日本主義的教養』に基づく思想研鑽を重ねつつ、教学理念を正し学風改革を推し進める運動を展開した。中核メンバーのひとりが無期停学処分となった東大小田村事件をきっかけに、運動は全国に広がり、日本学生協会（昭和十五年五月）及び精神科学研究所（昭和十六年二月）へと発展していく。しかしその過程で大学・学校当局と衝突し、文部省の文教政策を攻撃し、戦時体制の指導理念を批判するようになる。そして昭和十八年

行の作家としてヘッセが取り上げられ痛烈な批判が加えられている。同書は「かなしく雄々しき戦いは更に更に展開されねばならぬ」¹⁰という「はしがき」の言葉からも窺えるように、その論調は国粹主義的であり、ヨーロッパ文化への耽溺の後に「所謂学園は国を挙げての戦をどうしても実感出来ぬ学生をつくり上げてしまった」としている。以下、ヘッセに言及した箇所を引用する。

[...] 常住の家庭生活を営まず、見知らぬ土地を流浪するというのがヘッセの精神生活である。

こういう彷徨流浪の人生観が今日の高専大学の学生を惹きつける力を持っている。

しかしヘッセの美しい描写に惹かれて意志的に貫かれゆくべき国民生活を遊離し永劫流転の迷路にふみ込むことを不断に注意せねばならぬ。

ペーターカーメンチンドは二十七才の作品であるが、若きヘッセが、ひとりきり離れた自己を永久の生命を有する神に結びつけたいという悲しき欲求をいだきつつ、いかにせばそれが出来るかという所まで突込んではいない。

[...] 現実の緊迫せる国民生活は一瞬の彷徨

をも流浪をも許さない。固定概念理論の重圧よりのがれんとして彷徨文学に逃避せんとする者は人生の敗北者である¹¹。

『ペーター・カーメンツイント』の描写に美しさを認めつつも、これを実生活から人々を墮落の道に誘う悪書とし、また実際的なアドバイスが含まれていない点に批判を加えている。緊迫した時局においてヘッセがかように引き合いに出されていたことは、当時の若者への影響力の大きさを物語っていると言えよう。

2. ゲルマニストによるヘッセ解釈の揺らぎ

1942年、高橋健二訳『ヘッセ詩集』が新潮社から出版された。これは同年にドイツで出版されたDie Gedichteの翻訳である。同詩集は主に『処女詩集』(Gedichte, 1902)、『孤独者の音楽』(Musik des Einsamen, 1915)、『夜の慰め』(Trost der Nacht, 1929)、『新詩集』(Neue Gedichte, 1937)収録の詩作品により構成されており、訳詩集はこれをもとに区分を行なっている¹²。「あとがき」において、高橋はヘッセについて「極めて小説家らしからぬ小説家である」¹³と述べている。

(一九四三)二月のメンバー一斉検挙を経て、同年十月解散に至った。小田村事件については日本学生協会の出版物に詳しい。「同年(引用者注:1938年)三月同志学生小田村寅二郎君が法学部試験を通じて当時助教授たりし矢部貞治氏の学説を批判して氏の改説を促し、又四月河合栄治郎教授が「我々は(自由主義者の意)今こそマルキストと手を握り、共に人民戦線として右翼に砲弾を打ち込まねばならぬ」と、その社会政策開講の辞に述べた事実を同君が雑誌「いのち」九月号に執筆したことから、同年十一月無期停学処分をうけた」(「第一章 本研究所構成生命体の生成史実」63頁)とある。同論は打越孝明・井上義和・占部賢志[解題]『日本主義的學生思想運動資料集成II 資料・パンフレット篇《国民文化研究会所蔵》日本学生協会・精神科学研究所刊行物[復刻版]』(柏書房、2008年)の「第七卷 精神科学研究所の事業(その一)——組織と事業」に収録されている。同書は日本学生協会出版の『學生生活叢書』他、手書きの関連資料等を収録した十巻本である。ところで、同シリーズの第2巻である『日本学生協会の設立と全国合同合宿』に収録された『高校教育 創刊号』(高校教育研究会、昭和十五年六月十日)においては、「忘れられた「教育」という事」(142-144頁)のタイトルでドイツ文学者・芳賀檀の論稿が掲載されている。芳賀が投稿した経緯について、本稿では紙幅の都合上立ち入ることはしないが、同書への参加は少なくとも、東大関から失意のうちに遠ざけられ一匹狼であった芳賀の、東大に対する如実なる意思表明と言えよう。なお、同書に限らず、本稿では書名を除き引用文中の旧漢字・旧かな使いはすべて改めた。

10 『精神科学の根本問題——學生生活叢書第三輯——』日本学生協会発行、1940年、3頁。

11 同書、48-49頁。

12 高橋健二訳『ヘッセ詩集』新潮社、1942年、303-305頁(「あとがき」)参照。例えば『処女詩集』収録の詩は「処女詩集より」という副題に続いてまとめて収録されている。

13 同書、302頁。

しかしヘッセはより多く画家であるかも知れない。飄然と野山に遊んで絵筆をとる時、自分はほんとに解放されたような幸福にひたることができる、と彼は住訪した私に言ったことがある。そして、自ら絵をかき、詩を綴って讃をする支那の画人こそほんとの詩人だ、とも言った¹⁴。

ヘッセの言葉を受け、そして中国の画家との近似性を匂わせたところで、さらに次のように続ける。

[...] 雲や水や鳥や蝶を友として生きること、この上ない喜びを感じずる彼は、東洋風の画人であると言えるかも知れない。無常迅速の諦観を基調とする彼の詩の内容もそうした風格にふさわしいものである。さすらいの境地、即ち常に途上にあること、[...] 死を見つめつつ、これを恐れず、むしろ救いと感じずる心、そして自然のメロディーと共に生きようとする詩心、そうした心境はむしろ我々東洋人によってほんとに共感されるのであろう。恐らく彼は西欧の詩人の中で、我々の所謂「物の哀れ」を感じ得るごく少数の一人であろう¹⁵。(圏点は引用者による)

「支那」の画家から「東洋風」の欧米詩人、そしてこれが「我々東洋人」によりよく共感されるとして、ヘッセを「物の哀れ」を感じ取ることが可能な希有な詩人と評している。このようにして、東洋(的なもの)への接近ないし近似性から、一気に日本的な心性である「物の哀れ」へとヘッセを接続しているが、こうしたプロセスは日本の読者を引き込むために有効な手だてとなったであろう。同時期に読売新聞に掲

載された同訳詩集の広告においても「無常迅速を達観し死生を超脱することを念願して多分に東洋的なこのドイツ詩人の旅と孤独を愛する魂は、日本人の心境に最も親しく近い」¹⁶とある。しかしながら、ヘッセ自身はそもそも日本的な精神からの影響に言及することは決して多くなかった。1930年代に高橋を含む翻訳者ならびに新聞社は当時の日本に受容されやすくするべくヘッセ像に手を加えたが、そうした姿勢がその後も変わらず受け継がれていたのである。同様の狙いを有した評は、翌年1943年出版の秋山六郎兵衛による『獨逸文學史』にも認められる¹⁷。秋山によれば、ヘッセにおいてはロマン派詩人特有の放浪癖が東洋、インドに対する憧憬として表れていて、この憧憬というのはヘッセの出自に由来している。続いて『東方への旅』にも触れ、シュペングラーの『西洋の没落』との親近性に言及したうえで、来るべき東洋的・全体主義的文化が暗示されているとし、最後に仏教思想への理解を示した作品として『シッダールタ』を挙げている。

さて、こうした一連のヘッセ解釈とは対照的に、読者の受容の傾向について当時すでに警鐘が鳴らされていたことは留意すべきである。高橋義孝は「ヘッセとその作品」ならびに「ヘッセ問題」において、読者層におけるある特殊なヘッセ受容の様相に対し痛烈な批判を加えている¹⁸。まず「ヘッセとその作品」においては、ヘッセの出自および経歴を概観し、1927年発表の『荒野の狼』までを射程として、時系列に沿って作品を辿りながら、トーマス・マンやエーミール・シュトラウスを引き合いに出しつつ、ロマン派との関係ならびに文学ジャンル上のカテゴリーを確認し、ドイツ文学史におけるヘッセの立ち位置を考察している。そして、以下の引用では読み手の解釈が争点となる。

14 同上。

15 同書、302-303頁。

16 『読売新聞』1942年5月10日。

17 秋山六郎兵衛『獨逸文學史』(三笠書房、1943年)所収の「ヘッセ」の項(268-270頁)を参照。

18 高橋義孝『マン・ヘッセ・カロッサ』(南北書園、1947年)所収の「ヘッセとその作品」(57-74頁)ならびに「ヘッセ問題」(75-81頁)を参照。

愛と自由と——ヘッセの生涯求めてやまぬものはこれであろう。しかし我々は、愛と自由とにも色々の種類のあることを想わねばならぬ。[……] 東洋風の自由もある。愛情にしても同じであろう。すなわち我々はヘッセの考えているような自由と愛の性質をよく見定めてみなければならぬ。そして今日の世界にあつてヘッセ風の個人主義の意味における自由と愛とから、よく我々の幸福を期待しうるかどうかを想ってみなければならぬ¹⁹。

ヘッセの作品に表れる様々な要素を吟味せずに、「愛と自由」のみを受け取り手の都合に合わせて抽出する読みに対して、高橋義孝は異を唱えている。さらに次のように続ける。

これはヘッセ自身の問題というよりも、既に我々自身の問題であろう。しかも二重の意味において。——

というのは日本が、殊に日本の若い世代がドイツ詩人中特にヘッセを愛好するのは、実はヘッセの一部を、ヘッセの中の東方的要素を、すなわちヘッセにおける我々自身の投影を愛好していると考えられなくもないからである。自然にたいする浪漫的愛情、出世間的な離脱漂泊の想念、静寂主義的主観主義、神秘主義的個人主義など、我々の精神を永く培ってきた諸理念は、他のドイツ詩人のいずれにおいても、ヘッセにおけるほど鮮やかな形をとつてはいないのである。我々がヘッセを愛好しているのは実はヘッセによって、或は我々なりに受け取つたヘッセによって我々自身を甘やかそうがためなのだとしたら、問題はかなり複雑に

なつてきはすまいか²⁰。(傍線は引用者による)

高橋義孝にとって、ヘッセは「精神的ヨーロッパ人」²¹であり、根本の部分ではあくまでも西洋の思想体系、さらに言えば敬虔主義の血統を色濃く継いだ西洋人なのである。同書の「ヘッセ問題」においてはこれがさらに詳細に検討される。かの問題は「ヘッセを受けとるわれわれの側にあ」²²り、「われわれの受けとり方にはいつも何か原型歪曲の傾きがあつた」²³という。この偏つた受容を正すことは、日本におけるニーチェやハイネ受容の修正以上に困難であり、その理由として「日本におけるヘッセの位置のずれを修正するのは、われわれ自身の何かずれのようなものに手を加えることによつてのみ可能だからである」²⁴としている。

一般に同時代人の文学を論じたり客観的に規定したりすることは、いつもまたわれわれ自身を現実的に形成することでもあろう。そしてわれわれはヘッセを愛することによつて、しかもヘッセの世界の表層を愛することによつて、実はわれわれ自身の生活感情の一契機をなしているところのセンチメンタリズムを回顧しているといった事情がある。ところがこのセンチメンタリズムは、青年期にふと現れてまた消えてゆくような無邪気なものではなく、日本の精神史的伝統に深く根を下ろしている一種の浪漫的な生活感情のきわめてあさはかな近代的変様なのである²⁵。(傍線は引用者による)

高橋義孝は、読み手は読書の際にヘッセの「作

19 同書、73頁。

20 同書、73-74頁。

21 同書、65頁。

22 同書、75頁。

23 同上。

24 同上。

25 同書、75-76頁。

品」を読んでいるのではなく、あらゆる部分から喚起されるロマン的な感情を慈しんでいるに過ぎないことを指摘しており、それは日本人の心性に対してヘッセ作品が孕んでいる親和性の高さに起因すると認めている。しかしながら、ヘッセが内に抱く東洋のイメージとでも呼ぶべきものに対して、我々がヘッセの作品から掬い取るそれには大きな「ずれ」があるのだ²⁶。従来の解釈に対する批判が、その原因の分析も含めてようやく兆してきたのがこの時代であった。

3. 読者層の拡大へ

ヘッセを含むドイツ文学ならびに文化の受容は、第二次大戦前後において大きな局面を迎えた。1911年に発足した日獨協会は、以降日本とドイツの文化交流を一手に引き受け活動していたが、この大戦により両国間の交流は一時的に途絶えることとなる²⁷。大戦後の国交回復を経て二国間での文化交流事業は再開したものの、両国ともに敗戦国となったことは、少なく

とも日本側のドイツ文化受容に大きく作用した。GHQ指導のもと大日本帝国は解体、プロイセン憲法を手本としていた大日本帝国憲法に代わり民主主義を基調とした日本国憲法が施行され、遠くとも、あるいは遠く隔てられているからこそ憧れの地としての地位を欲しいままにしていたドイツは、アメリカという現実の強い国にすげかえられたのである。当時、文化という側面においてはアメリカの一人勝ちと言える状況であったが、こと文学に関しては異なる様相を呈していた。確かにアメリカ文学受容は戦後興盛を極めたが、ドイツをはじめとしたヨーロッパ文学も脈々と読み継がれていたのである²⁸。そして、40年代以降の受容において特筆すべきは、ヘッセとその作品が一部の教養層や研究者だけでなく、より広範な読者層に開かれていった点である。

3-1. 少年少女とヘッセ

1955年11月20日の毎日新聞には登張正実に

- 26 登張正実「ドイツ文学における東洋思想」(「第二節 ドイツ文学における東洋思想」宇野精一他編『講座 東洋思想 第9巻 東洋と西洋II 文化と文芸思潮』東京大学出版会、1967年、21-57頁所収)において、ヘッセに至るまでのドイツ文学における東洋思想の在り方を捉えようと試みている。同論では上村晴延の『ドイツ文学と東洋』(郁文堂、1951年)を出発点とし、ドイツの詩人ならびに作家における東洋思想の把握の在り方、これに対する反応ないし「抵抗」の在り方を捉え、ドイツ人の思考形態の核心を理解しようとした。登張の言うところの「抵抗」とは、否定するというのではなく、取り込みつつもそれを超越することを意味する。同論は二部構成であり、「一 概観」(21-38頁)においては、ドイツ文学の精神性の成立について、インドや中国の思想をいかに吸収していったかを踏まえ、トーマス・マンの作品を引き合いに出しつつ論じられている。ドイツ文学に影響を与えた東洋思想の系譜として、フランス経由の「シナ趣味」としての中国思想、ロマン派とショーペンハウアーを通じて受容されたインド思想、ゲーテやニーチェによって輸入されたベルシャ文学の三点が挙げられ、とりわけインド思想がシュレーゲル兄弟の業績を通じて思想や文学に色濃く影響を与えていったとまとめている。こうした系譜を辿っていけば、ヘッセの東洋的な作風とはゲーテらに顕著に見て取れる「ドイツらしさ」を正統に継承した結果の産物であると分かる。「二 ヘッセのばあい」(38-56頁)においては主に『シッダールタ』と『ガラス玉遊戯』を引きつつ、ヘッセの作品の根本におけるドイツらしさに言及している。すなわちヘッセは東洋思想を取り込んだ作家の一人でありながら、かつこれを超えようとした作家でもある。ヘッセは作品においてある到達点を描くもののそこには安住せず、さらに彼岸を目指してやまないのであり、その意味では「涅槃」を最終到達点とする仏教とは根本的に思想が相違する。ヘッセはあくまでも、どこまでもヨーロッパの作家なのである。
- 27 当時の日本とドイツの文化交流の様相については、『日独文化交流の史実』(財団法人日独協会編、1974年)ならびに『日独協会100年史』(公益財団法人日独協会編、2011年)に詳しい。財団法人日独協会は2010年に公益認定を受け、公益財団法人となった。
- 28 ただし戦前までの作品に限る、と留保をつけざるをえない。日本においてはドイツの翻訳文学として読み継がれているのはいずれも「古典」ないし「近代」の域にある作品たちであり、第二次大戦後のいわゆる「現代」ドイツ文学に関しては、翻訳点数は決して多くなく、知名度という点でも戦前の作品に比してかなり低い。こうした事情については、保坂一夫「日本におけるドイツ文学受容の問題」(『ドイツ文学』日本独文学会、75号、1985年、139-143頁所収)に詳しい。同論においてはわが国における1950年代から80年代までの外国文学受容が争点となっている。

よって「少年少女のために」の題でヘッセの紹介記事が掲載された。作家の簡単な紹介があり、最後は具体的な作品名が挙げられている。

みなさんはヘルマン・ヘッセというドイツの詩人であり作家の名前をごぞんじですか。お兄さんお姉さんのご本の中にはあるかもしれませんね。ドイツの作家では日本で最も愛されている人のひとりです。[...]ヘッセには少年の成長をあつかった作品がたくさんあります。自分の良心にあくまで忠実なヘッセは第一次世界大戦の時、ドイツはこんな戦争をしてはいけないと大胆に説いたりしました。その後ヘッセは中国やインドの思想を学び、西洋と東洋をあわせてものを考え、人間にとって最も美しい、最も尊いものを、人間がたえず帰りもとめる心のふるさとともいうような世界を作りあげようと努力しました。一九四六年ノーベル文学賞をうけましたが、みなさんもきっとそのうち「郷愁」「デミアン」「シッダールタ」「ガラス玉遊戯」などヘッセの作品をどれかお読みになる時がくるでしょう²⁹。

「少年の成長をあつかった作品がたくさんある」という記述から、同記事は思春期の少年少女を対象として書かれていることは明らかであり、また「お兄さんお姉さんのご本の中にはあるかもしれませんね」と呼びかけている点、また平易な文体から、同記事は思春期の中でもとりわけ小学校高学年程度を対象に書かれたものと推測できる。ヘッセの戦中の態度や晩年の思想までを広く射程として記述しており、初期作品である『郷愁』、中期の『デミアン』、そして『シッダールタ』および『ガラス玉遊戯』の後期二作品と偏りなく作品を挙げている点は、これまでヘッセ作品の紹介が初期作品に偏りがちであつ

た傾向を鑑みれば意外な印象を受ける。続く12月5日には手塚富雄によるヘッセ作品の紹介記事がまたもや掲載された³⁰。同記事では、作品を三つ選ぶとすれば、「初期のものから『ペーター・カーメンチント』が考えやすいが」と断りつつ、作品の「ほりが浅い」としてこれを退け、『デミアン』、『シッダールタ』、『ガラス玉遊戯』を取り上げている。中期の転換期における作品と後期、そして晩年の作品を重視するという傾向は「ヘッセ＝青春文学」という定式を破らんとする、ゲルマニスト側からの意思表示と取れなくもない。しかしながら、こうした姿勢にも関わらず、『シッダールタ』はさておき、『ガラス玉遊戯』が広く知られ読まれるということはついぞなかったことに留意せねばならない。すなわち、ゲルマニスト側からは後期作品への関心を促す動きが少なからず存在したものの、ヘッセの青春作家のイメージを突き崩すことはなかった。受容の初期段階において固定されたヘッセのイメージを覆すまでには至らなかったということであろうか。

3-2. 女性読者とヘッセ

3-2-1. 婦人雑誌

40年代の末、高橋健二によるヘッセ関係のコラムならびに短篇の翻訳が『婦人友友』において数多く掲載されていた。1948年「ヘッセと平和への道」を皮切りに、続く1953年は「詩人の母——マリー・ヘッセの生涯」のタイトルで、1月号から6月号まで連載があつた。婦人向け雑誌であることを考えると、このテーマ選択は納得のいくものである。同年9月号には「ヘッセの故郷を訪れて」と題したエッセイが、1956年には『浄財の罪』(Pater Matthias, 1910)の全訳が7・8・9月号にわたって連載された³¹。翌年2月号には「ヘッセの青いチョウ」のタイトルで再びエッセイが、そ

29 登張正実「少年少女のために」『毎日新聞』1955年11月20日。

30 手塚富雄「ヘッセ バストスリー」(『毎日新聞』1955年12月5日)を参照。

31 7月号(130-137頁)に第1章及び第2章が、8月号(148-156頁)に第3章及び第4章が、9月号(148-155頁)に第5章及び第6章が掲載された。

して10月号には『ピクトルの変身』(Piktors Verwandlungen, 1922)の翻訳が掲載された。1959年11月号の「ヘッセ夫妻との再会」を節目に、ヘッセ関係の記事はしばらく見られなくなる。同記事の内容はヘッセへの最後の訪問についてであり、その後まもなくヘッセが世を去ったことを鑑みれば、しばらくはヘッセについて何がしか物申す気になれなかったであろうことは想像に難くない³²。

さて、学者や研究者、あるいは評論家といった広義の専門家ではなく、文学作品の執筆を中心におく作家がヘッセについて書き残した文章はあまり多くはないのが実情である。そうした中で、作家によるヘッセ評として最初期に書かれたものが、芝木好子が1954年に雑誌『主婦の友』に発表した『春の嵐』評であることは些か目を引く³³。「名作人生読本」とタイトルがつけられていることから窺われるように、同文はヘッセの半生とともに作品を紹介し、主人公クーンの甘く苦い青春に触れ、「作者ヘッセが描いている、このような純粋な青春回顧こそ、心の糧として、どんなに私達のおわたしい日常に、潤いを与えてくれるかしれません」³⁴として締め括っている。主婦の友社は1916年に創業、翌年『主婦の友』を創刊した。創業者である石川武美は『婦女界』や『婦人の友』といった婦人雑誌に携わり、石川が書き下ろした同社の処女出版『貯金の出来る生活法』は、雑誌の創刊資金となるほど大いに売れた³⁵。当時、女性は小学校を卒業すれば活字とは縁のない生活に入っていくものであり、石川はこうした女性たちのために実用的な婦人雑誌の発行を決めたのであった。戦前に芥川賞を受賞した気鋭の女

流作家である芝木が書き手に選ばれたのは、女性の地位向上を目指した同誌の方針に則ったものであったと考えられる。また先の引用箇所からも見て取れるように、漢字にはすべてルビが振られている点から、読み手を教育することを強く意識した誌面作りがなされていたことが窺われる。

3-2-2. レーフェル会

読者層が拡大する中で、学術の場から離れたところでヘッセに関する団体が生まれたことも、この時代の特色と言える。そうしたものの一つに、1959年1月から開かれていたヘッセの愛好会であるレーフェル会が挙げられる³⁶。高橋健二は1955年より雑誌『心』において「ヘッセ研究」の連載を開始し、また同時にこれまでのヘッセ作品の訳業をヘッセの80歳の誕生日の記念に向けまとめることに着手していた。これらは最終的には新潮社より全14巻の翻訳全集である『ヘッセ全集』として1957年3月から翌年6月に出版され、別巻である『ヘッセ研究』は1957年12月に出版という形になった。『ヘッセ研究』は1958年に読売文学賞を受賞し、その受賞記念講演会にて作家の横山美智子がヘッセの読書会を始めたいと高橋に提案したことが、レーフェル会の発端である。1959年にフランクフルトで開かれた国際ペン大会に出席するため渡独した高橋は、スイスの避暑地ジルス・マリアのホテルに五日間滞在している間にヘッセを訪ね、同会の活動について触れ、会の命名を依頼した。ヘッセは少し考えた後、「読んで理解する会」としてはどうかと提案したのだった。この「レーゼン・ウント・フェ

32 同誌にヘッセの翻訳が再び現れるのは1977年1月号の『婚約者』(Die Verlobung, 1908)であり、ここから堰を切ったように、2月号に『ハンス・アムシュタイン』(Hans Amstein, 1903)が、4月号には『恋の犠牲』(Chagrin d'Amour, 1907)、5月号には『ソナタ』(Eine Sonate, 1906)と続く。ややあって、1981年には「わたしの愛する2人の作家——ケストナーとヘッセ」の題で、およそ20年ぶりにエッセイが掲載された。

33 芝木好子「名作人生読本 春の嵐(ヘルマン・ヘッセ)」(『主婦の友』主婦の友社、2月号、1954年、280-284頁所収)参照。

34 同書、284頁。後述する理由から、漢字にあてられたルビはすべてそのまま残して引用した。

35 塩澤実信『出版社大全』論創社、2003年、185-188頁参照。

36 「ヘッセ命名の読書会」(『人間の生き方——ゲーテ ヘッセ ケストナーと共に』郁文堂、1990年、155-160頁所収。初出は『日本経済新聞』1988年9月15日)を参照。

ルシュテーエン・フェライン」を縮めて、レーフェル会と言う呼び名に落ち着いたとのことである³⁷。同会の活動は後にヘッセの死に際して朝日新聞でも取り上げられた³⁸。

おわりに

1940年代から50年代にかけて、ヘッセはゲルマニストの手から次第に離れ、広く世間において様々な読者層の間で本格的に読まれ始めたのであり³⁹、換言すればこの20年間はヘッセが一般読者のものへとなくなっていった時代であった。このことはテレビ業界の人間である渡辺もと子の「私の学生時代ノーベル文学賞を受けたヘッセの作品は当時、日本でも次第に紹介されるようになっていた」⁴⁰という言葉からも裏付けられよう。1930年代、片山敏彦は「日本では、ヘッセの作品は次第に広く読まれ始めているようである」⁴¹と書いたが、当時片山の周辺にいたのは、いわゆるエリート層出身の「旅に出かける人」や「ビューローに働く人」、「学校の寄宿舎に起居する人」であり、ヘッセが広く読まれるようになっていったのは、渡辺の指摘の通り

ようやく戦後になってからのことであった。また、読者層の拡大という点で、ヘッセの作品が国語教育に浸透していったことは無視できない。1946年にヘッセがノーベル文学賞を授賞したことを受け、当時の文部省は著作権室を通じGHQに『少年の日の思い出』(*Jugendgedenken*, 1931)の中学校国語教科書への使用を申し出た⁴²。そして1955年には全国学校図書館協議会と毎日新聞社が主催する青少年読書感想文コンクールが開始されている。全国学校図書館協議会によれば同コンクールは「児童生徒・勤労青少年を対象に、読書活動の振興等を目的に1955年に始まった息の長い読書運動」⁴³であり、『車輪の下』は現在に至るまで中学生の部の第1類(自由図書・フィクション部門)において頻繁に取り上げられる一冊となっている⁴⁴。こうした事情は、ヘッセの潜在的な読者の獲得に当時は少なからず寄与していたに違いない。

そして、本稿で扱った時代がわが国におけるヘッセ受容の一つの転換点となっていることは、続く60年代の様相に目を転じることで再確認できよう。以下の書評記事からは60年代の世相の片鱗を読み取ることができる。

37 「ただ、長すぎて困るので、頭だけとって、レーフェル会と称し」た、と高橋は述懐している。高橋健二「二つの読書会と私」(『京都新聞』1975年8月31日)を参照。

38 「ヘッセの死と日本の主婦のグループ 残念がるレーフェル会員」(『朝日新聞』1962年8月12日)を参照。

39 このことは50年代に文学全集の出版ブームが起こり、ヘッセの翻訳作品全集に関しても複数の出版社から刊行され、出版競争が起こっていたことと無関係ではない。拙論「Die Hesse-Rezeption in Japan in den 1950er Jahren durch Essays, Verlagsgeschichte und Briefe」(『国際経営フォーラム』神奈川大学国際経営研究所、第27号、2016年、237-264頁所収)を参照。

40 渡辺もと子『ヘッセからの贈り物』人文書院、2006年、21頁。

41 片山敏彦「ヘッセの文學の背景」(『心の遍歴』中央公論社、1942年、120-133頁所収。初出は『文藝』1939年7月号)121頁。

42 「中学国語に外国作家 ヘッセとルナール」(『朝日新聞(大阪版)』1947年8月16日)を参照。ところで『少年の日の思い出』は、自作である『クジャクヤママユ』(*Das Nachtpfauenauge*, 1911)を改稿し、ドイツの地方紙Würzburger General-Anzeigerの1931年8月1日号に掲載された作品である。高橋健二は1931年にヘッセを訪問した際その切り抜きを渡され、帰国後に翻訳したものが国語教科書編纂者の目に留まったという経緯がある。高橋健二「ヘッセへの道」(高橋健二他『ヘッセへの道——高橋健二古稀記念論文集』新潮社、1973年、7-114頁所収)33-34頁、及び岡田朝雄「高橋健二 ヘッセ翻訳・研究の第一人者」(『忘れえぬ人びと』朝日出版社、2017年、41-53頁所収)46-48頁を参照。

43 公益社団法人全国学校図書館協議会『第63回 青少年読書感想文全国コンクール』<http://www.j-sla.or.jp/contest/young/1> (2018年1月7日アクセス)

44 こうした動きに呼応して、1968年には新学社より、巻末に全国学校図書館協議会参事による読解の手引きが付された高橋健二訳『車輪の下』が刊行されている。同書は「新学社文庫」シリーズの一冊であり、裏表紙カバーに「学校納入定価」の記載があることから分かる通り、一般書店ではなく中学校向けに販売されていた。同シリーズは既に絶版となっている。

一九六〇年代の学生運動華やかなりしころ、アップダイクの『走れウサギ』が読まれていたという記憶はあまりない。当時はヘッセの『荒野のおおかみ』やケルアックの『路上』が読まれていたことが示すように中流や小市民が忌避されていた時代だったのである⁴⁵。

ジョン・アップダイクの『走れウサギ』(1960年)のシリーズは、アメリカの中流階級の中年男性を主人公とし、同作発表の後に約30年かけて完結した息の長い作品である。一方で、『荒野のおおかみ』では中流の小市民であると同時に現代を生きるアウトサイダーの側面を持つ主人公が、そしてビート文学の代表ともされるケルアックの『路上』(1957年)ではアメリカを自由に放浪する、やはり社会のアウトサイダーである主人公が据えられた作品である。70年代、『荒野のおおかみ』がアメリカでのヘッセブームを受けて日本でもヒットするようになったことは周知の事実であるが、アメリカからの影響を受ける以前、ヒッピーブームとは無関係にすでに一定の評価があり広く読まれていたことは記憶に留めておくべきであろう。すなわち、戦後の混乱が終息し、安定した堅実な市民生活の素晴らしさが高らかに謳われる中で、『荒野のおおかみ』は既存の体制への反抗の文学として、ヘッセは反体制の旗印としてすでに新たな地位を獲得しつつあった。それは取りも直さず、ヘッセがゲルマニストの手を離れた後、受容初期からヘッセ像に纏わりついていた「東洋」や「青春」といった鍵語の呪縛から解放され一般読者のものとなり、以後は読者たちの価値観に従って読まれ続けていることを意味しているのだ。60年代、そしてヘッセ受容が次の最盛期を迎える70年代についての考察は、稿を改めることとしたい。

45 「さようならウサギ1・2 ジョン・アップダイク著(書評)」『朝日新聞』1997年11月23日。